



住谷悦治の談話(1975年12月19日) : 「同志社アカデミズム」を中心に : 【解説】「同志社アカデミズム」からキリスト教社会問題研究会へ--「キリスト教的、開拓者的、理想主義的精神の火」の継承のために

著者	林 葉子
雑誌名	キリスト教社会問題研究
号	70
ページ	1-31
発行年	2021-12-20
権利	同志社大学人文科学研究所
URL	http://doi.org/10.14988/00028669

特集 音声資料からたどる同志社の歴史（1）

住谷悦治の談話（1975年12月19日）

—「同志社アカデミズム」を中心に

Etsuji Sumiya's Talk on 19 December 1975 about the History of "Doshisha Academism" and the Foundation of the Institute for Study of Humanities and Social Sciences of Doshisha University

本稿は、『キリスト教社会問題研究』が本号で70号となることを記念して、1975年12月19日に開催された同志社大学人文科学研究所・キリスト教社会問題研究会の総会における住谷悦治の談話（音声記録⁽¹⁾）を紹介するものである。なお、本稿中のタイトルおよび括弧内の記載は解説者が追記した。

This is an introduction of voice record of Etsuji Sumiya's talk on 19 December 1975 about the history of "Doshisha Academism" and the foundation of the Institute for Study of Humanities and Social Sciences of Doshisha University. According to Sumiya's talk, the study group of "Christianity and Social Problems" (CS) in the Institute for Study of Humanities and Social Sciences which had been led by himself was the revival of "Doshisha Academism" in 1920's.

1975年——同志社創立100周年と住谷悦治の同志社総長退任の年

竹中正夫（キリスト教社会問題研究会・代表者（当時））

住谷先生には、12年、ずいぶん長い間、そしてかなり変転の多い時に（第14代同志社）総長としてお務めいただきまして、同志社の歴史はもとより、日本の近代化の中において同志社を捉える（住谷）先生が、総長の任におられたと



【図1】 談話当日の住谷悦治

いうことは、一つの点においては、同志社の一つの安定的なシンボルを表してくださったのではないかと、ありがたく思っております。

（同志社創立）100年という、ちょうど切り目の時に、3期をお務めになって、先生がご引退されるわけですが、CS（キリスト教社会問題研究会）の仲間として、またご先輩として、またご尽力、ご指導いただきたいと思っております。

私どもの研究も、いろいろな点で遅々として進まない点もありますし、学習面にあたって何かの貢献をしなきゃならないと思いつつも、十分なこともできずに100周年を迎えたわけですが、同志社のこれからの100周年のためにも、もう少し地道な研究を、それぞれ補いあいながら、励ましながら、やりたいと思っておりますので、先生にご指導を、



【図2】 住谷悦治（右）と土肥昭夫（左）

相変わらず、お願いしたいと思っています。先生、いろいろ、どうもありがとうございました。

杉井六郎（司会）

それでは、よろしく願いいたします。

住谷悦治

では、私、ご紹介をいただきましたが、私はもう、皆さんのような専門家の方々の中で申し上げるようなことは非常に少ないのですけれども、同志社へ来た頃のアカデミズムについて、「同志社のアカデミズム」なんて言われる、その空気を、簡単に（ご紹介します）。

それから第二は、海老名（弾正）先生が（第8代総長を）辞められた時のことを。それは、史料はたまたま、持ってきまして、私は何も言いませんけれども、それにありますから、それをごらんになって。広げて、もう、自由に見てください。もちろんCSに寄付しますから。

それから第三は、CS研究会ができた最初の頃のことを、ごく簡単に申しますから、まとめて言いませんけれども、あと、雑談でいろいろ出れば、私の知っていることを申し上げます。

吉野作造の紹介で同志社大学法学部の助手に

私は大正11年、1922年に同志社へ参りました。そしてその22年は（東京帝国大学法学部を）卒業した年で、その年の正月になっても、私は就職のことを考えなかったんです。

私は（東京帝国大学の）YMCA におりましたが、YMCA の卒業生が、皆、その時は、もうすでに12月までに就職が決まっています。いつのまにか皆、決めてしまっていたんですね。

千葉雄次郎が朝日新聞に行くとか、^{くるま}来間恭が毎日新聞に行くとか、^{みつ}河野密が大阪朝日新聞に行くとか、小岩井浄と細迫兼光は大阪で民衆の弁護士をやるとか、同じクラスの安田重雄という人は、朝鮮の平壤の高等法院にと、皆、決まったのに、^{かざはや}風早（八十二）^{やそじ}と私は、何も考えていない。私はそういうことを考えておらず、「何とかなるだろう」くらいに思っていたら、いつのまにか正月になってしまった。

「吉野（作造）さんが心配しているから、ちょっと吉野さんのところに行くように」と言われて。就職が決まらないから、吉野さんのところに行くように、というわけで、風早と二人で行ったのです。

そしたら、吉野さんのところに、就職の口が3つあったのです。一つは西南学院。これは、〔音声不明瞭〕のお弟子さんのところでした。そして、一つは（北海道帝国大学農科大学教授の）森本厚吉の助手で、これはフランス語ができて、森本厚吉のために午前中必ず翻訳をすると。それからもう一つは、同志社の法学部の助手で、これももちろん月給はあって、60円で、「何かアルバイトすれば大丈夫だから」という話があって、「どうだろう？行く気があるか？」と。

風早の方は森本厚吉のところに行くということでした。で、私は、まあ同志社は、新島先生のことを聞いていましたから、どうにか。見たことがないんだけど、「同志社の助手になります」と。

だけど私は「大学の先生なんかになる資格は、とても自信がない」と言ったら、吉野先生っていうのは楽観主義者で、「いや、そんな誰だって、自信のある大学教授っていうのが、初めからあるわけじゃない」と。すごく楽観主義者で。それで「2、3年を学校の先生の勉強をして、その間に、きっちり勉強して4、5年も経てば、講義くらいできるようになる。聴きに来る学生は、みんな素人だから」というような。これは、もう、実に楽観主義者ですね。

そして、そういうようなことで、一つには「将来は学者になる。大学教授に



【図3】同志社大学法学部時代の住谷悦治

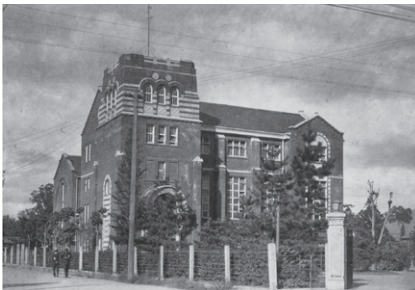
なる。大学教授は、良い講義をしなくちゃいかん。良い講義を、学生にわかりやすくする」と。第二は「教授をやるだけじゃなしに、やっぱり学者として、内にも外にも、良い学者となるつもりでないといかん」。そして一番難しいけど、最後は、第三は「良い教育家になれ。ならなくちゃいけない。それが大学教授の任務だ」というようなことを（吉野先生が）言って、（私は）「ありがとうございます」なんて言って、同志社に来ることになりました。

それが正月の始めでありまして、吉野先生が、すぐ同志社の方へ承諾したという手紙を出したらしいんです。



【図4】石田秀一郎

そして（1922年）2月8日に、東大と京大の（両大学弁論部の）連合演説会があって、私も講演を、（京都市）岡崎公会堂——焼けない、前の公会堂でやっていた。その時に、ヨゼフ・ディーツゲン（Joseph Dietzgen, 1828-1888）の哲学を読んで、論文集を（紹介しました）。それが終わったら、石田秀一郎【図4】〔一部音声不明瞭〕（とい



【図5】図書館（現・啓明館）



【図6】法律・政治・経済の研究室

う)先輩が、すぐ私のところに来て「同志社大学の人が住谷さんに会いたいというから、私と一緒に来てくれ」と。

ついていくと、同志社の当時の研究室が図書館(現・啓明館)【図5】の4階にあって、法律・政治・経済の研究室【図6】で、全部、本も先生も、みんなそこでまどまどしていて、小さかったんです、非常に。

同志社は、神学部がとにかく中心で、有名な先生がたくさんいて。それから文学部は、私は文学部のことはあまり知らないのですが、ロンバード(F.A.Lombard)さん【図7】という先生が、よく教授室に来ました。それから園頼三さん【図8】がいましたね。

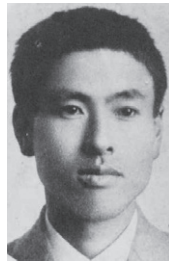
法学部では、初めて会う人たちと、図書館の向かいの一番広い奥の部屋で、恒藤(恭)さん【図9】と阿部賢一さん【図10】と塩見清さん【図11】と栗生くりう武夫さんと山口正太郎さん【図12】、黒川芳蔵さん【図13】、和田武さん【図



【図7】ロンバード
(F.A.Lombard)



【図8】園頼三



【図9】恒藤恭



【図10】阿部賢一



【図11】塩見清



【図12】山口正太郎



【図13】黒川芳蔵



【図14】和田武

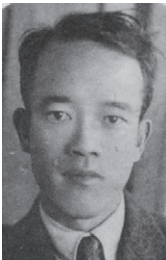
14] など、7、8人の人がいて、何かいろいろ質問しまして「波多野さんを、どうして知っているんだ?」と。波多野鼎さん【図15】は、私よりちょっと一ヶ月ばかり先に同志社に決まっているというような、そんな話でした。

恒藤さんは「あなた、公会堂で、新聞によると、ヨゼフ・ディーツゲンの哲学について話したと言われているけれども、あれ、英語で読みましたか、ドイツ語で読みましたか?」というような話で、「いやあ、私は英語で読みました」と言うと、「私はドイツ語の本をもっているから、読みたければお貸しします」なんて言われて。そんなことで、いろいろ、阿部賢一さんなんかにも、テストをされまして。

結局、最後に帰ったら、後に、阿部賢一さんに（その時のことを）言ったら、「君は、（その時）採用に決まったんだ」ということでした。とにかく、首実験をされたい、と。

「同志社アカデミズム」の形成期

それから（1922年）4月になって、研究室の部屋に行って、その頃、学生にちょっと会った時に、それはたしか中江君という人だったと思うんですが、門のところで会って「君、この頃、何しているんですか?」と尋ねたら、「新カント派をやっています」と言われて、びっくりしました。



【図15】 波多野鼎



【図16】 中島重



【図17】 講義する中島重

その頃、新カント派っていうのは非常に盛んで、恒藤（恭）先生、中島（重）先生【図16】【図17】、山口正太郎さん、その他の人たちが、新カント派の哲学を盛んにやっておられて「やっぱり、ああいう人たちの影響だ」とかって、びっくりしたんですが。

後になってみると、その頃の同志社の学風っていうのが「同志社のアカデミズム」だなんて言われるのですが、その空気は、非常に“研究好き”でした。

時々、研究会をやって、その研究会には助手なんかも（参加して）、助手や講師は、今の徳照館【図18】の奥の部屋なんですが、東南の部屋で、あそこで必ず研究会をやったんですが。その時に、いろんなテーマで誰かが研究発表する。それにみんなが意見をいって、代わるがわる、やるんですが。

たとえばですね。林要さん【図19】は、私より1年遅く、同志社に来た人ですけども、林要さんがクラーク（John Bates Clark）の大きな本（クラーク『分配論—賃金、利子及利潤論』岩波書店、1924年）を訳して出版したんです



【図18】 徳照館



【図19】 林要

が、それから、ゾムバルト（Werner Sombart）の『社会主義及び社会運動』を訳したということがありました（ゾムバルト『社会主義及び社会運動』同人社、1925年）。その時、林さんが、たとえばですね、左右田喜一郎、新カント派の哲学者ですが、左右田喜一郎の *Geld und Wert* という本（Kiichiro Soda, *Geld und Wert: eine logische Studie*, J.C.B. Mohr, 1909）を紹介したんです。

そして、左右田喜一郎さんは、ドイツに、その頃、最高の経済学者、哲学者としてフックス（Carl Johannes Fuchs）という人がいて、そのフックスの弟子に、シュテフィンガー（Ludwig Stephinger）という人と左右田という人の二人が、甲乙つけがたい秀才だった。シュテフィンガーと左右田喜一郎が、盛んに論争をする。左右田喜一郎が先に *Geld und Wert* という本を書いたら、シュテフィンガーが *Welt Und Geld* という本を書いた。そしたら、フックスの『経済原論』（*Volkswirtschaftslehre*, Walter de Gruyter, 1925）を見ますと、二人の（弟子の）、左右田がこう言っている、そしてシュテフィンガーはこう言っている、と、両方のものが、この小さい本ですけども、この『経済原論』には、それが引用されているんです。自分の相弟子の二人が、その甲乙をつけようがないということで。それで林さんは、その *Geld und Wert* という本を紹介したんですね。

そうすると、新カント派の話がだんだん出てきて、左右田喜一郎の、当時出た新カント派の本（左右田喜一郎監修、横浜社会問題研究所編『新カント派の社会主義観』岩波書店、1925年）が話題になったりして。そうすると、新カント派のことは、恒藤さん、中島さんなどは、盛んに勉強していました。

だいたい、議論をすると、中島先生は実証主義的な立場であるし、中島さんに言わせると「恒藤さんは観念論だ」と。そういうようなことで、盛んに「観念論じゃないんだ」というような議論になって。「観念論しかないんだ」と恒藤さんはムキになって。それから、いろいろ、今中（次磨）さん【図20】【図21】も出て、政治学も、新カント派の話が出てくると、いろいろ論議が出るの

です。そうすると、恒藤さんも中島さんも今中さんも、非常に論客でして、恒藤さんなんかは「原書には、こう書いてある」と。「今中さんのこの読み方は間違いじゃないですか？」ってというようなこと。「私はこう解釈する」「いや、それは違います」というようなことで、そういうような、原書をさしはさんでの研究会でした。

私たちは、そばで、「こういう人は、勉強しているんだな」と思って、その先生たちの論争を聞いていて、非常に刺激を受けました。

『同志社アカデミズム』と『同志社論叢』

その頃、初めは『政治（学）経済（学）論叢』（京都同志社大学法学会、1919年）が出ていましたね。それから、海老名（弾正）さん【図22】の総長になった頃から、『政治（学）経済（学）論叢』が『同志社論叢』（同志社法学会、1920年3月創刊、1920～1949年）という雑誌になりました。その『同志社論叢』というのが、（同志社の）法学部から出ました。

法学部というのは、政治・法律・経済が一緒になっていますが、その法学部の規則を起草したのは恒藤さんでした。そんなわけで非常に論議があって、そ



【図20】 今中次磨



【図21】 講義する今中次磨



【図22】 海老名弾正

の論議なんかを中心として、皆、私ら若い者は、興奮して。

たとえば、石田秀一郎さんと私と恒藤さんは、隣あって下鴨に住んでいたんです、3軒。そうすると、学校からそのまま、誰がこう言った、こう言ったというのを議論しながら、私の家の前まで議論していました。そして、私の家の前で、一生懸命、議論していて。うちの連中は「何を言っているんだ？」と思って、ドアを開けて（こちらを）見る。恒藤さんと私と石田さんは家に入らないで、家の前で議論する、というようなことが、度々ありました。

そんなわけで、中島さん、恒藤さん、今中さん、林さん、能勢（克男）さん、皆さん、素晴らしい人ですが、議論がありました。

だから、そういうことで『同志社論叢』に出したのは、最初の頃をごらんになればわかるように、新カント派の哲学とか、その他、誰々の意見はこうだというようなことが論文の多くを占めていて「『同志社論叢』というのは、外国の思想だけをやたら紹介して、自分の見解が出ないな」と言われたことがあったんです。

ともかくそんなわけで、研究室の人数は少なかったけれども、活発に議論をして、それがだんだん『同志社論叢』に出たので、恒藤さんの新カント派の哲学書（『批判的法律哲学の研究』内外出版、1921年）とかジンメル^{（ママ）}の貨幣哲学（『ジムメルの経済哲学』改造社、1923年）とか、中島先生の『法理學概論』（更生閣、1925年）とか、今中さんの『政治学史』という大きな本（『政治学』上巻、内外出版、1924年）が出まして、同志社にこういう学者がいるんだということが認められたらしいです。

恒藤さんが最初に訳した本は、ブレハノフの『マルクス主義の根本問題』（岩波書店、1921年）という小さい本で、これは非常によく読まれました、私も、大学を出るとすぐに読んで、教えられました。

私は、恒藤先生に下宿を紹介してもらって、月給は法学部から60円。予科の方の「経済学概論」を持って、60円もらって。（合計）120円というのは、当時

における最高の給与でした。当時、(大学を)卒業した人では、日本銀行とか、官庁だったら大蔵省、財務省、内務省というところが、大概85円くらいで、大学卒業生の最高だったのですけれど、それが一般の定評だったのですけれど、私は同志社に来たおかげで、アルバイトというか、予科と、助手との方で120円と、私はおそらく給料では抜群だったのでないかと。どうやら生活できるようになり、結婚できるようになり、ようやく結婚しました。

予科では、初めから英語の本で経済学を教えて、それなんかも、わからない単語がたくさんあるので、特に経済学史には、ドイツ語とかフランス語とかラテン語が出てくるんですね、ちょいちょい。その学史のところから始めたんですが、朝、その日の講義に向けて隣の恒藤先生のところに行って「このラテン語はどういう意味ですか?」「このドイツ語はどういう意味ですか?」と、朝、恒藤先生のところに行って、いろいろ教えられたりしました。

そんなことで「同志社のアカデミズム」というのは、そういう議論をすることによって育っていく、その結果が、いろいろ論文に出て、認められるようになったのではないかと。海老名弾正先生が総長でしたから、その有名な名前があると同時に、『同志社論叢』となって、第1巻、第2巻が出まして、第3巻、第4巻と続いて、それが認められたんじゃないかというふうに考えています。

その他、もちろん他の先生もいて、皆それぞれ研究されていて。同志社出

の人としては、黒川さんもいたし、田畑忍さんが入りまして、その前に高橋貞三さんが助手で入りまして、松山^{あきら}斌さんがいらっしやいました。そういう人がいました。恒藤さんの弟子では、宗藤圭三さん【図23】が京都大学で聴講したりして、統計学で最初に、統計学研究の大きな本を書いています(宗藤圭三『統計学講義 方法論的研究』更生閣、1926年)。(1分ほど音声不明瞭)



【図23】宗藤圭三

海老名弾正の総長辞任をめぐる

それから、海老名先生のもので、先ほどの史料をご覧になるとわかりますが、内部の対立点がありまして。それは（京都・洛北の）岩倉の土地問題で、（同志社の理事の）西村金三郎という人を攻撃するもので、彼が政治的に投票の地盤をつくるために、いろいろと策動したということが載っています。

岩倉の今の（同志社）高等学校の敷地を、こっそりと1坪3円くらいでサッサと買って、いよいよ買い尽くした時に発表して。全部発表したのです、どこからどこまでと。それで同志社街をつくるということで発表したの、岩倉の方の人は面食らってしまっ。学校では、理事会は、岩倉に（同志社）高等商業（学校）を作って、そしてそこは同志社になる、と。みんな、びっくりしちゃって。

そのやり方が、あまりにも商売的であり、坪3円で買ったのが4円、5円、10円と高くなってですね。非常に〔音声不明瞭〕、林さんなんか为中心で、それを反対した。そのために『同志社新聞』で、その中に、西村金三郎を、それは吉野先生と同期なので、それがやり玉に上がって。西村金三郎さんは非常に手腕のある人で、理事会を牛耳っていると。『同志社新聞』を見ると、そしてたくさんの声明集を見ると、西村金三郎の独裁を抗議する、と。

そして能勢さんのような文章の上手な人が、非常に壮大な論文を書いて、抗議文を書いて、ということになりました。そして理事会に反対する人と、理事会に反対しない人が分かれて、岩倉の土地問題を中心に、だいたい二つに分かれて、それがやがて問題になったんです。

昭和3年（11月23日夜半）に、有終館が（一部火災で焼けて）、その時は、皇室が御所に来ていて、「御所の平安を害した」とかいて、理事会全体が総辞職して。海老名さん以下、全部総辞職しています。それから学生は、運動部を中心に皆、丸坊主になって、紫宸殿の、正門前ですね、御所の前に行ってお詫びしたんですが、海老名先生はちょっと体を悪くして入院していたんだ



【図24】海老名弾正の総長再選を求め、理事会を批判する『同志社新聞』の号外(1929年2月22日)



【図25】能勢克男

けれども、(同志社を) 出てしまった。そして、混乱した同志社理事会が、今度は再び、前の理事会は弾劾してから、全部前の理事会の人が復活したので、海老名先生だけが置いてけぼりになって、海老名先生が除け者になって、そして理事会が(同じメンバーで再び) 成立したんです。

今度は、海老名先生擁護のために、中島先生は海老名さんの(本郷教会の) 愛弟子だったので、中島先生が中心に理事会を攻撃する、と。西村金三郎その他を中心に理事会を攻撃すると。

その(1929年4月24日付の法学部教授らによる) 声明文^(ママ)(「⁽²⁾ 声明書」)が、ここにありまして、これは後でお役に立ったら(ご覧ください)。この(「声明書」)の原稿は林(要)さんが書いた原稿で、非常に苦心して書いたものです。これを能勢さんが手を入れて、この原稿ができたんです。

能勢さんは『同志社新聞』をつくった人ですから、『同志社新聞』は能勢さんが中心に、高橋貞三さんが、高橋信司が、学校の教授の方から入って、そして能勢さんが中心で、学生は、相沢清吾とか西浩吉や、他は3人が入って『同

『同志社新聞』を出した。これ、持ってきました。非常に澁刺とした新聞で、これが理事会を堂々と攻撃したんです。能勢さんの文章は素晴らしいので、中島さんも舌を巻いて。

これ（「声明書」）なんかですね、もちろん林要さんが下書きをしましたけれども、能勢さんが手を入れてジャーナリストティックに編集してあります。文章は堂々としております。

これは、「（声明書）」に署名したのは中島重さんが中心で、能勢、住谷、高橋信司、高橋貞三、その他、松山さんとか難波（紋吉）さんとか林要さん、宗藤圭三、石田秀一郎、田畑忍。こんなわけで、これが一つの「同志社アカデミズム」の最後の姿だと思います。

そして、これができるまでに、すでに恒藤さんはいろいろな事情で京都大学に行く、と。それから、栗生武夫さん、山口正太郎さんは〔音声不明瞭〕。こういうことを、理事会を攻撃できたというのは、中島さんが中心になって、チャペルで、中島さんが中心で、皆で演説して「矢は手を放れた」ということで。中島さんと高橋さん、能勢さん。最初に能勢さんと高橋信司さんと高橋貞三さんが拍手をされたんです。それから後に、いろいろ問題があって、高橋貞三さんは辞めてしまった。海老名先生は総長の地位を下ろされたんで〔録音切れ〕。

それで、その後、中島さんも（辞めて）、海老名さんが辞めた後、大工原銀太郎さんが（総長になって、1929年11月23日の）就任演説の時に「同志社学園からマルキシズムを制御する。止める。反対だ。」ということを就任式で言ったのです。それで「大変なことになった」と思っていたところが、やっぱり、その頃、日本共産党は、地下運動や、その周囲もいろいろ、シンパもやられるというので、私や、林さんらも皆、辞職されて。

その後、大工原さんが比較的早く（1934年3月9日に）亡くなって、（1935年4月24日に第10代同志社総長に就任した）湯浅八郎さんが（1935年6月の）

「神棚事件」⁽³⁾でも悪戦苦闘していました。湯浅さんは非常に気の毒だったけれども、湯浅さんだから、あれだけやれたんだと思います。

キリスト教社会問題研究会（CS）の発足と研究活動

あとは、印象的なのはCS研究会。これは文部省の方で（1956年度の）科学研究費というものをもらって。たまたま私が、（同年に）「キリスト教と社会問題の研究」という問題を、内部の先生たちを何人か、協力者ということで出して、そして文部省の科学研究費を300万円もらうことになりました。

ちょうどその時、私は科学者会議（日本学術会議）に入っていたので、その分会があって、その審査委員で、守屋典郎さんとか藤田敬三さんとか私とか、早稲田大学の福山君が審査委員にいて。藤田さんという人は強引な人で、会議でですね、各方面から30ほど来る論文を見て、自分の関係するものを「これを評価してくれ」と言うんで、私も「これは同志社のキリスト教と社会運動（というテーマ）だ。同志社で、ぜひ、これが必要で」と。なんだか、話し合いなどの関係でですね、結局、藤田さんが強引だから、私も強引で。結局、パスしたんです。そんなわけで、藤田さんが強引なんで、それに対抗して強引にやって、研究会が科学研究費をもらえたという。案外あっさりと、何の心配もなしに、もらったんです。

それで、それを中心に（1956年から）同志社内、キリスト教社会問題研究会をつくり、これがCSの始まりです。篠田（一人）さんや、そういう方々が実際にやって。高屋（定国）さんは文献集めをして。文献を集めるのが、最初の問題だった。

その後、中国革命が起こって、エンチン・ハーバード（インスティテュート）の奨学金をどこへやろうかと、アメリカの方で考えて。「これは、日本がいいだろう」「日本は、どこがいいだろう？」ということで、たまたま同志社に（与えられることになった）。

その後、篠田さんが中心になりまして、同志社のやった業績を、遠くアメリカの方へ、本国へ報告して、非常に好感をもたれてですね、毎年毎年、援助資金を得られた。というようなことで、CSが外部の力によって発展した。

それから後は、このことについては、CS（『キリスト教社会問題研究』）や『社会科学』や、このあいだ出ました本（同志社大学人文科学研究所編『人文科学研究所30年史』同志社大学人文科学研究所、1975年）に、歴史が、非常に詳しく正確に書いてありますから、そのとおりでありまして。

高屋君と私は文献を集めてきて、たとえば、荒畑寒村さんの話を聞く、と。熱海の資料館に、4日間も閉じ込めて。というか、来てもらって。テープレコーダーで荒畑さんの話を、みんな録って。あいにく、協議があって「こういうふうに話してくれ」「2時～4時までの間のことは、何もテープにとらない」というわけだったんですけれども、高屋さんは、みんな録って。荒畑さんが話したことを、みんな、テープに記録を録っていて。それで「山川均君と菊栄さんが、ラブ・アフェアがあって、銀座のどことどこで（二人が）会っていたんですよ」なんていうような（荒畑さんの）話が、みんな、テープに残っていた（笑）。それを後で荒畑さんが知って、「あんなものを録ってはいけないよ！」「菊栄さんが死なないうちは、発表しちゃ、いかん！」というようなこと言われて、そのテープが4巻か何か、CSにあるはず(4)です。まだ活字に戻してないから、あれをご覧になったら、相当に面白いものが出てくるのではないかと思います。まあ、そんなこともありまして。

エンチン・ハーバード（インスティテュート）からも（研究資金をもらい）、文部省の300万円もお金をもらってあったので、それで古本を買ったので、世評ではですね、大河内（一男）さんが東京から「同志社で、何でもかんでも、みんな言い値で古本を買うので困る。あんまり、言い値で買わないようにしてくれ」なんて言われていたし、鈴木茂三郎さんは、自分の個人（のお金）で社会問題やキリスト教の文献を集めていましたから「同志社では、ブルドーザー

式に、みんな金にあかせて買うのでかなわん」ということを、朝日新聞に鈴木茂三郎さんが書いて、そんな、ブルドーザー式(5)に買った覚えはないんですけども、ともかく、文献を集めることが大事だと、研究はそういうものだと。

その（史料を用いた）研究が、今、皆さんによって進められているということです。（拍手）

竹中

どうも、ありがとうございました。

確か、この前、集まった時に、（住谷）先生は「もう今度は、総長はしない」（とおっしゃったので、「じゃあ、何をなさいますか？」と私が伺いましたら、「二つ、本を書きたい」と。

一つは、ラーネッドさんの本を。それは、先生のご在任中に出たわけです（住谷悦治『ラーネッド博士伝一人と思想』未来社、1973年）。もう一つは、住谷天来の仕事を書きたい、ということをおっしゃっておられました。おそらく（総長を）3期、お務めになって、これから、住谷天来のご研究をお出しになるんじゃないかと、私どもも楽しみにしています。ますますご健在で、私たちの研究を指導してください。

今、お話がありましたように、CSの初期の頃のことなんかを思い出しますと、寒い時にオーバーを着ながら座ってやると、なお寒いものですから、立って、文献目録を高屋さんなんかと一緒に皆で見て、「これを注文したらどうだ？」「買ったらどうか？」というようなことを相談したことを覚えております。もう19年くらい前のことだと思いますけれど、確か20万円くらいを大学から借りて初めの研究費にしたようなことも、覚えております。

その頃に比べますと、今の研究所の体制、いろいろ問題もございますけれども、十分整えられてきたと思います。また、新しい年を迎えまして、そういう創生期の時のご苦心を解して、これからも研究を進めていきたいと思います。

【解説】

「同志社アカデミズム」からキリスト教社会問題研究会へ

——「キリスト教的、開拓者的、理想主義的精神の火」の継承のために

林 葉 子

HAYASHI, Yoko

住谷悦治と『キリスト教社会問題研究』

住谷悦治（1895-1987年）は『キリスト教社会問題研究』の生みの親である。

『キリスト教社会問題研究』は本号で70号となるが、それを1958年5月に創刊したのは、住谷を代表者とする15名の呼びかけによって1956年1月に組織されたキリスト教社会問題研究会（通称CS）であった。同会が1959年度から同志社大学人文科学研究所（以下、人文研）に正式に所属するのに伴い、『キリスト教社会問題研究』も、同年10月発行の第3号からは、人文研の刊行物として位置づけられることになった。⁽⁶⁾

ここで紹介する住谷の談話は、彼の同志社総長退任と同志社100周年とが奇しくも重なった1975年に、CSの総会で、研究仲間や後輩たちに向けて語られたものである。その内容の一部は、彼の著作の中でも断片的に記されているが、吉野作造、海老名弾正、恒藤恭、中島重、林要、今中次磨、石田秀一郎、山口正太郎、能勢克男といった人々との交流のエピソードが重ね合わされ、一つのストーリーとして語り直されることによって、「同志社（の）アカデミズム」の実像が、生き生きと浮かび上がってくる。

この住谷の談話には、「同志社アカデミズム」とCSの結びつきの有り様が示されている。1920年代の「同志社アカデミズム」に培われた学問の土壌が、戦後のCSの発足と研究活動へとどのように展開されていくのかという点につ

いて、住谷の見解が、ここに示されていると言えよう。その「同志社アカデミズム」は住谷自身の学問スタイルを確立させた土壌でもあり、それを知ることは、住谷悦治の思想を捉えるためにも必須である。

「同志社アカデミズム」の研究スタイル

「同志社アカデミズム」の「空気」を、住谷は“研究好き”と表現している。住谷が同志社大学法学部の助手に着任したばかりの頃、同学部を集った若い教員たちが熱心に本を読み、議論を重ねることを心から楽しんでいた様子が、当時を語る住谷の声の調子からも伝わってくる。

住谷のマルキシズムへの関心の強さは、彼が1922年に同志社の教員に着任するまでに、すでにはっきりと表明されていた。住谷の同志社への採用を決定づけた対話の一つが、ヨゼフ・ディーツゲンの著作をめぐる恒藤恭との「英語で読みましたか、ドイツ語で読みましたか？」というやり取りだったというエピソードは、「同志社アカデミズム」の性質を知る上で、決定的に重要である。

日本では、同志社出身の社会主義者である山川均が1929年にヨゼフ・ディーツゲンの著作の翻訳を刊行しているが（ディーツゲン『辯證法的唯物観』改造文庫）、ドイツ出身のディーツゲンは「革なめし工場の職人」でありながら、仕事時間以外の半日を学術研究や社会主義運動に費やしていた人物であり、山川によれば、マルクス、エンゲルスが社会学上、史学上に発達させた新思想が、ディーツゲンによって「哲学的の基礎を置かれた」のだという⁽⁷⁾。

そのディーツゲンの哲学を演説会で紹介したという住谷に対して、恒藤が投げかけた質問は、“なぜ”ディーツゲンを演説のテーマに選んだのかではなく、“どの言語で”ディーツゲンの著作を読んだのかという問いであった。それは、住谷の研究のプロセスが、どれくらいの深度で、どのように進められているのかについての問いであり、思想や信条が自分と一致するかどうかについての問

いではなかったのである。思想や信条が異なっているにもかかわらず、そこに至る思考や研究のプロセスについて互いに議論するというスタイルならば、異なる意見を持つ者同士が、多様性を保ちながら学び合える。しかしそうした「同志社アカデミズム」の空気はやがて失われることになり、住谷は、ただその思想がマルキシズムに近いというだけの理由によって、警察で拷問された後、職を奪われることになってしまった。

住谷の談話の中で最も重要な位置を占めているのは、そのディーツゲンをめぐる採用時のエピソードを含む、恒藤恭との交流である。恒藤と住谷の居宅は隣り合っており、彼らは大学の研究会の議論だけでは飽き足らず、大学から家までの帰り道も共に議論を続け、家にたどり着いても、やはり玄関前で議論を続けたという。そうしたフランクな議論の中でも、恒藤が常に参照した本の原書の記載を大切に捉えようとしていたという点に、住谷は特に着目している。恒藤は、英語、ドイツ語、フランス語、ラテン語を使いこなす博覧強記の国際派で、住谷は、授業準備のために読んだ経済学史の本の中に分からない外国語があると、出勤前の朝の時間に恒藤を訪ねて教えを乞うたほどであった。

自由闊達な議論を大切にしながら、その議論は原典に基づいて行うという「同志社アカデミズム」の研究スタイルは、戦後、住谷らによって始められたCSにも受け継がれていった。外からは「ブルドーザー式」と見えるほどのCSの史資料収集への熱意と、その収集した史資料に基づいて共同研究を行い、議論し、論文として成果を発表するというスタイルは、現在まで続くCSの基本姿勢である。そして、かつて「同志社アカデミズム」の成果が『同志社論叢』で公表されていったように、CSを創始した住谷らは、『キリスト教社会問題研究』に優れた研究成果を発表し続けた。

海老名弾正が支えた「同志社アカデミズム」

「同志社アカデミズム」を成り立たしめた一つの要は、当時の同志社総長

だった海老名弾正のリーダーシップである。この住谷の談話では、「同志社アカデミズム」の成立と終焉が、海老名の総長就任と退任とに重ね合わされ、その一致は、必然のこととして語られている。つまり、住谷によれば、海老名のリーダーシップこそが「同志社アカデミズム」を根底で支えていたのである。

住谷が同志社大学の教員になった背景として、その少し前に、同志社が、（専門学校令ではなく）大学令に基づく「大学」に昇格し、優れた教員の確保を最大の課題の一つとしていたという事情がある。1918年12月6日の大学令公布にともない、同志社に大学昇格への動きが起こり、1920年4月15日、同志社大学は大学令による設立認可を得た。⁽⁸⁾ その翌日、4月16日に、海老名弾正の同志社総長就任式が行われた。海老名は、その総長就任にあたって、新島襄の教育理念に基づき、人格主義、デモクラシー、インターナショナリズム、男女平等主義の4つの主義を掲げ、それらの理念のもとに、同志社を「大学」の名に相応しい場とするための整備を行うことになった。⁽⁹⁾ 住谷の回顧談によれば、この大学昇格以後に、「同志社が社会科学史上において注目されるようになった」⁽¹⁰⁾のだという。

住谷が1922年4月に吉野作造の推薦で同志社の助手に着任することになったのも、海老名と吉野の本郷教会における深いつながりを背景としている。海老名から吉野への要請によって、住谷だけでなく、中島重、今中次磨、和田武、林要ら、東京帝国大学法学部の吉野の教え子たちが、次々に推薦され、同志社大学法学部の教員として着任したのである。そのような法学部のスタッフの充実、海老名の総長時代の業績として、よく知られている。海老名のリーダーシップのもとで、そのように同志社大学法学部に集められた俊英たちによって、「同志社アカデミズム」は形成されていったのである。

住谷によれば、「同志社アカデミズム」の中心軸となったのは、新カント派の哲学であった。その「同志社アカデミズム」の具体的な成果として、『同志社論叢』に掲載された論文のほか、恒藤恭『批判的法律哲学の研究』（内外出

版、1921年）、同『ジメルの経済哲学』（改造社、1923年）、今中次磨『政治学』上巻（内外出版、1924年）、中島重『法理學概論』（更生閣、1925年）、宗藤圭三『統計学講義 方法論的研究』（更生閣、1926年）等が紹介されている。

「同志社アカデミズム」の「最後の姿」

しかし「同志社アカデミズム」を支えた海老名総長は、同志社大学の有終館の失火事件の責任を独り背負われ、1928年11月25日、「総長の地位を下ろされ」ることになった。海老名だけに失火の責任を負わせた理事会に対する法学部の一部の教員による抗議活動を、住谷は「同志社アカデミズム」の「最後の姿」であったと表現している。

海老名の総長辞任をめぐるのは、海老名が本郷教会の牧師であった頃から指導を受けていた中島重を中心として、抗議活動が行なわれた。また、住谷の談話においては、海老名総長の退任をめぐる理事会批判の先頭に立った人物として、能勢克男、高橋貞三、高橋信司ほか、学生たちも参加した『同志社新聞』の抗議活動が重要な動きとして紹介されている⁽¹¹⁾。とりわけ、能勢のジャーナリスト的な力量が高く評価されている。しかし、1929年4月13日、同志社の理事会は、法学部の教員であった高橋貞三、高橋信司を解雇し、続いて能勢克男も解雇した。翌5月には、中島重に対しても、理由なしに解職が通告された。

海老名の総長辞任前後の経緯と、法学部の一部の教員らの理事会による誡首への抗議活動の背景については『同志社百年史』等にも詳細が記されている⁽¹²⁾。住谷が談話の中で言及している「声明文」とは『同志社百年史』通史編二でも言及されている1929年4月24日付の「声明書」のことであろう（pp.1074-1075）。その全文は『同志社百年史』資料編二の「解説」に転載されている⁽¹³⁾。その記録によれば、「声明書」は、中島重を筆頭に、能勢克男、高橋貞三、住谷悦治、高橋信司、難波紋吉、松山斌、林要、長谷部文雄、宗藤圭三、和田武、石田秀一郎、田畑忍の順に、同志社大学法学部教員13名の連名で出されている。林要

が構成し能勢克男が手を加えたその「声明書」は、次のような書き出しで、同志社の精神的な危機を強く訴えかけるものであった。

我々は、今、諸君の前に、同志社に於ける最も悲しむべき事実を、報告しなければならない事を、恥ぢ且つ悲しむ者である。

何故ならば、我々の力が微弱で、我々の智慮が浅かつたために、同志社に於ては、今、設立者新島襄先生の基督教的、開拓者の、理想主義的精神の火が、消え果てんとし大学の本領たる思想の自由、研究の自由が、蹂躪し尽されんとしてゐるからである。⁽¹⁴⁾

この「声明書」は、理事・西村金三郎が「同志社内のあらゆる行政を独裁する専制者」となって、同志社を「政治地盤」として利用しようとし、岩倉村に「資本家的投機的買占」を行い、教員や学生から慕われている総長・海老名弾正を煙たがって追い出し、その海老名の送別会を「陰惨に、窮屈に、恰も刑事犯人を護送するかの如く、警戒され、弾圧され」るものにしたと非難するものであった。そして西村ら理事会の人々が、そのような「恐怖行政」を行うのは、「私心」の「強行」のためであり、「剛直なる正論、厳正なる批判」を恐れているからであると分析している。⁽¹⁵⁾

この「声明書」の筆頭者である中島重は、彼が批判した理事会によって解雇されることになった。海老名に代わって次の同志社総長となった大工原銀太郎は、住谷によれば、就任早々、同志社からのマルキシズムの排除を宣言したとのことである。⁽¹⁶⁾そして住谷は、1933年7月、共産党シンパであるとの疑いによって検挙され、拷問され、同志社大学に辞職届を出さざるをえない状況へと追い込まれることになった。⁽¹⁷⁾自由な議論を基礎とする「同志社アカデミズム」は、そのようにして失われていったのである。

住谷が同志社を去った後に刊行した『日本経済学史の一齣』（大畑書店、

1934年)には、同志社大学法学部の教員時代の後悔として、自分が同志社の研究室に文献を十分に収集することができなかったことを書き記している。当時、「法学部に関する限り、図書費・研究室費は(中略)毎年四千円内外の予算であり、十数人の専任講師が廣く参考書を渉獵するといふことは甚だしく困難な状態」であったと説明しながらも、「同志社法学部経済学史の研究室を斯くの如き貧弱さのまゝに残して同志社を去ったのは全く私の責任である」と述べている⁽¹⁸⁾。住谷は、談話の中でも、同志社法学部時代の研究室について「全部、本も先生も、みんなそこでまとまっていて、小さかったんです、非常に」とその貧弱さを強調している。そして、そのように研究活動や学習の土台となるべき書籍を十分に揃えることのできなかった過去の悔しさは、後の同志社の人文科学研究所における執念ともいべき文献収集への情熱へと転じていったのではないかと考えられるのである。

「同志社アカデミズム」の継承をめざしたCSの研究活動

1949年4月、住谷は同志社大学に経済学部の講師として復帰した。同年7月には同学部の教授に昇進し、1953年4月には経済学部長、1957年には学校法人同志社評議員会議長、そして1963年11月、第14代同志社総長に就任した(1975年11月まで)。

その多忙さの中で住谷は、1956年1月にCSをその代表者として立ち上げ、研究活動を率いたのである。CSの発足の「趣意書」には、研究会の目的を「近代日本の社会思想、社会運動に及ぼしたキリスト教、とりわけプロテスタントの影響を明らかにし、これに関する資料を蒐集、整理、研究するとともに、この資料を広く国内外の研究者の便に供する」と定め、日本の近代化の先頭に立ったプロテスタント、特に「組合教会員、同志社の先輩」についての研究を進めることを宣言した。その「趣意書」に名を連ねたのは、住谷の他、藤代泰三、岩井文男、高橋虔、竹中正夫、秋山国三、小倉襄二、嶋田啓一郎、篠田一

人、住谷申一、和田洋一、安永武人、吉川哲太郎、井ヶ田良治、岡本清一、田畑忍、西村豁通、小野高治、松井七郎、高屋定国、杉井六郎、辻橋三郎、平林一⁽¹⁹⁾である。

かつて、1920年代の「同志社アカデミズム」が基礎としたのは主に欧米の人文社会科学の文献であり、「外国の思想だけをやたら紹介して、自分の見解が出ない」と批判されることもあったようであるが、CSが最初に取り組んだのは、近代日本キリスト教史、すなわち、「同志社アカデミズム」の歩みを含む、自分たちの歴史であった。「同志社アカデミズム」が目指した社会問題の解決という課題に、かつてのような理論的アプローチではなく、歴史的なアプローチによって取り組もうとしたのである。特に住谷の歴史研究の中で、海老名弾正とその時代が重視されていたことは、彼が『同志社時報』の創刊号に執筆した「同志社人物誌」の連載の第1回目のテーマが海老名弾正であったことからわかる。住谷は其中で、海老名が総長を辞任するにあたって「最後の大雄弁」を振った時のことを「いまだかつてわたくしはこのような感激的な光景に逢ったことはない」と書き記している⁽²⁰⁾。

『キリスト教社会問題研究』第1号の「創刊のことば」では、CSの歴史研究の核となる考え方について、当時の大学長の大下角一が次のように述べている。

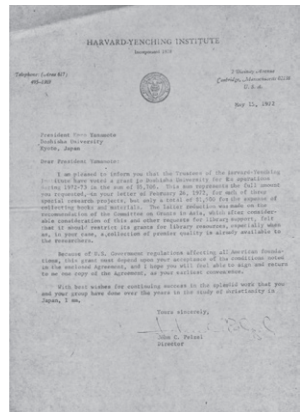
士農工商のはっきりした階級制度の中に生きた封建的な日本人が、民主主義時代に生きる人間として必要なるものは、自己に対する尊厳、また自由平等の確信であって、この確信こそ、キリスト教人生観において与えられたものと信じます⁽²¹⁾。

CSにおいて歴史研究を充実させていくためには、まず、史資料を集めなければならなかった。そのための資金として、文部省からの1956年度の科学研究費300万円に加え、1959年7月から1974年までの約15年間に、ハーバード燕京

研究所（Harvard-Yenching Institute）から、総額4,445万円の資金援助を得られたことが、CSの研究活動を大きく進展させた⁽²²⁾。直接にハーバード燕京研究所に赴き、近代日本キリスト教史研究のためにはアメリカンボード側の日本ミッション関係資料の入手が必要であると説明したのは、竹中正夫・同志社大学神学部教授（当時）である。人文研所蔵の竹中正夫資料の中には、1972年2月の「ハーバード・エンチン研究所研究助成申請書」の写しや、同助成の決定通知文書の写しが含まれている。

その申請を行なったメンバーは、申請代表者の竹中と同志社総長の住谷の他、神学部の教授および助教授が計8名、文学部の教授・助教授・助手が計15名、法学部の教授および助教授が計3名、商学部教授1名、人文研の助教授2名、同志社女子大学の教授および助教授が計3名、その他、同志社の各部署からのメンバーを含む、計44名であった。

この「ハーバード・エンチン研究所研究助成申請書」において、注目すべきは、どのような研究成果と研究計画が、研究資金助成の対象として認められたのかという点である。『キリスト教社会問題研究』に掲載された論文や個人研究の成果の他、CSが1972年の申請時までにCSの「研究叢書」として刊行していたのは、『日本におけるキリスト教と社会問題』（みすず書房、1963年）、『熊本バンド研究』（みすず書房、1965年）、『戦時下抵抗の研究 キリスト者・自由主義者の場合Ⅰ』（みすず書房、1968年）、『戦時下抵抗の研究 キリスト者・自由主義者の場合Ⅱ』（みすず書房、1969年）、『近藤栄蔵自伝』（ひえい書房、1970年）であった。そして、「今後の活動計画」としてCSが示した研究計画の柱は、①「教会研究」、②「海老名弾正とその周辺」、③「キリス



【図26】ハーバード・エンチン研究所研究助成の決定通知文書

ト教と社会主義ならびに国家主義」の3つだった。

住谷の談話を踏まえた上で、このような初期のCSのテーマ設定について改めて確認してみると、その初期のCSの研究活動の中では「同志社アカデミズム」の歴史経験が強烈に意識されていたことが感じとれるのである。新島襄の教育理念を受け継ごうとした海老名らがたどってきた道を、戦時下の挫折も含めて振り返り、輝かしい伝統を正しく踏まえながらも同じ失敗は繰り返すまいと強く意識したことが、CSを新しい理論の形成よりも先に、歴史研究へと向かわせたのであろうと考えられる。中島重の「社会的基督教」も、後のCSの研究活動の中で重視され、『キリスト教社会問題研究』には、嶋田啓一郎「中島重の社会哲学と社会的基督教」（第5号、1961年）、田畑忍「中島重博士の国家論」（第8号、1964年）、武邦保「社会的基督教における中島重」（第20号、1972年）のほか、多数の中島重論が掲載されている。

CSの歴史研究では、文献を用いるだけでなく聞き取りも重視したことが、住谷の談話で紹介されている。この談話の中では荒畑寒村への聞き取りが一例として言及されているだけであるが、前述の「ハーバード・エンチン研究所研究助成申請書」には、「海老名弾正とその周辺」の研究方法として、①聞き取り資料の収集、②海老名家所蔵資料の調査・収集、③『新女界』の総目次の刊行、の順に挙げられており、「聞き取り資料の収集」が最重要課題であったことがわかる。

そして、ここで紹介するこの談話の音声記録も、やはり、そのような聞き取り資料として残されたうちの一つだった。この談話の中で住谷によって語られたエピソードの一つ一つは、彼の著書である『同志社の一隅から』（法律文化社、1967年）や、『あるところの歴史』（同志社大学住谷篠部奨学金出版会、1968年）と重なる話も少なくない。しかし、肉声を通じてのみ伝わってくる情報も、確かにあると思われるのである。たとえば住谷が、恒藤恭や中島重や今中次麿らが自由に熱心に議論を重ねていく様子に接して「こういう人は、勉

強しているんだな」と思ったと何気ない感想を語る時、その彼の声の調子には、“研究好き”な先輩たちへの親愛の情が滲み出ていて、そのような語りを聴いていると、聴いているこちらまでその“研究好き”な人たちを好きになっていくから不思議である。そして、その談話を繰り返し聴いているうちに、私は、住谷らがただ“研究好き”なだけでなく、“人間好き”でもあったことに気づかされたのである。

住谷が、12年もの長きにわたる同志社総長としての任務を終えた直後に、自らが中心となって立ち上げたCSのメンバーが集まる場で話したテーマが、「同志社アカデミズム」の歴史経験、そしてその理念のCSへの継承であったという事実は、未来の同志社における研究のあり方を考える上でも重要な示唆を与えてくれる。欧米の思想や理論を重視した「同志社アカデミズム」のスタイルが、近代日本キリスト教史研究を主軸とするCSへと変化していったように、研究のテーマや方法は、今後も少しずつ変化してゆくだらう。しかし、そうした変化の中でも、今の時代に必ず受け継がれるべき同志社の理念は何であるかを考えるのは、後進の者に与えられた宿題である。

注

- (1) 1975年12月19日に京都の菖蒲園にて開催された同志社大学人文科学研究所・キリスト教社会問題研究会総会の音声記録（同志社大学人文科学研究所所蔵）。
- (2) 『声明書』『同志社百年史』資料編2「解説」所収、学校法人同志社、1979年、1831-1836頁。
- (3) 湯浅八郎総長時代の「神棚事件」とは、1935年6月1日、同志社高等商業学校に新しくできた武道場に一部の学生が無断で神棚を設置し、校長がその学生たちを説得して自主的に撤去させたところ、新聞等で問題化され、結果、軍部の意向に沿ってキリスト教主義を曲げ、再び神棚を設置することになったという事件である。『同志社百年史』通史編2、学校法人同志社、1979年、1094-1102頁、参照。
- (4) 人文科学研究所の書庫において荒畑寒村へのこの時の聞き取りのテープの所在について調査を行ったが、現時点では見つかっていない。

- (5) 鈴木茂三郎は、代議士として活動する傍ら、30年近くにわたって独力で社会主義関連の文献を収集し続けていた。その約1万点の文献（「社会文庫」）は、1966年、日本近代文学館に寄贈された（「モサさん「社会文庫」を寄贈」『朝日新聞』夕刊、1966年11月8日、11面）。おそらく住谷が言及している朝日新聞の記事とは、この寄贈を報じた記事か、1967年11月24日の「本とわたし」欄の記事（「古本が高すぎるよ」愛書と別れた寂しさ」『朝日新聞』朝刊、1967年11月24日、23面）であると考えられるが、両方とも古本の高値を嘆いているものの、記事の中では同志社には言及していない。
- (6) 同志社大学人文科学研究所編『人文科学研究所の50年』同志社大学人文科学研究所、1994年、17-18頁。
- (7) 山川均「ディーツゲンの為人とその哲学」ディーツゲン著、山川均訳『辯證法的唯物観』改造文庫、1929年、21頁。
- (8) 『同志社百年史』通史編1、学校法人同志社、1979年、824-882頁。
- (9) 同前、883-884頁。
- (10) 住谷悦治「同志社の学問史寸言」『私のジャーナリズム』積慶園、1954年、183頁（初出は『同志社学生新聞』1950年11月21日）。
- (11) 能勢克男は後に、この頃のことを『同志社時報』に執筆している（能勢克男「『同志社新聞』創刊のころ」『同志社時報』第6号、1963年11月）。
- (12) 前掲『同志社百年史』通史編2、1033-1082頁、平山玄「同志社人物誌（55）西村金三郎」『同志社時報』第78号、1985年3月、参照。
- (13) 前掲注2。
- (14) 同前。
- (15) 同前。
- (16) 河野仁昭「同志社人物誌（68）大工原銀太郎」（『同志社時報』第92号、1991年11月）において紹介された大工原の就任演説の様子は、住谷の語りが与える印象とは、やや異なる。河野によれば、大工原の演説は、新島の精神を強調するものであったという。ただそれは「自由」を重視すると述べながらも「絶対的自由」は「誰にも許されて居ない」と主張するものであった。
- (17) 住谷悦治著、田中智子翻刻・解説『住谷悦治日記 1933（昭和8）年』同志社大学人文科学研究所、2020年、参照。
- (18) 住谷悦治『日本経済学史の一齣』大畑書店、1934年、1-2頁。
- (19) 「同志社大学キリスト教社会問題研究会趣意書」『キリスト教社会問題研究』第1号、1958年5月、41-42頁。
- (20) 住谷悦治「同志社人物誌（1）海老名弾正」『同志社時報』創刊号、1962年11月、32頁。
- (21) 大下角一「創刊のことば」前掲『キリスト教社会問題研究』第1号、1頁。
- (22) 前掲『人文科学研究所の50年』、20頁。

* 図版の出典と所蔵は、以下の通りである。

図1、2：『CS アルバム』（同志社大学人文科学研究所蔵）

図3、4、5、9、11、13～21、23、25：1926年度・同志社大学卒業アルバム（同志社大学人文科学研究所蔵）

図6、7、8、10、12、22：1921年度・同志社大学卒業アルバム（林葉子・個人蔵）

図24：『同志社新聞』1929年2月22日、号外（同志社大学総合図書館蔵）

図26：竹中正夫資料（同志社大学人文科学研究所蔵）